



Title	尊敬の助動詞「ハル」の成立をめぐって：明治期大阪語の場合
Author(s)	金沢, 裕之
Citation	阪大日本語研究. 1993, 5, p. 33-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7718
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

尊敬の助動詞「ハル」の成立をめぐって ——明治期大阪語の場合——

On the Formation of Honorific Auxiliary Verb *haru*

金 沢 裕 之
KANAZAWA Hiroyuki

キーワード：明治期大阪語，尊敬助動詞，「ハル」，速記本，SP レコード

1. はじめに

現在，近畿中央部を中心に隆盛を誇っている尊敬（丁寧）の助動詞「ハル」については，「ナサル」からの変化がほぼ定説化しており，¹⁾その変化の経路についても大体似通ったいくつかの説が見られるが，その成立の時期と予想される江戸末期から明治期にかけての口語的な資料が従来はほとんど見られなかったため，実証的な面からの解明はまだ充分には行なわれていなかったと言える。本稿では，江戸末期の戯作及び，明治期の落語資料（中期の速記本，後期のSP レコード）を利用して，具体例の検討を通じて，（江戸末期から）明治期大阪語における助動詞「ハル」の成立の様相を見てゆきたいと思う。

尚，今回使用する落語資料については，「明治期大阪語資料としての落語速記本とSP レコード」（『国語学』第167集，1992）及び，「明治期大阪語の打消表現」（『日本近代語研究2』，ひつじ書房，1993）の拙稿で詳しく述べているので，そちらを参照されたい。

2. 江戸後（末）期の情況

明治期の検討に入る前に，広く歴史的な流れを把握しておくために，江戸後（末）期における情況を，これまでの研究なども参考にしながら調べ

ておきたい。

まず山崎久之氏は、その労作『国語待遇表現体系の研究』(武蔵野書院, 1963) の第二編第四章第二節第三の2 (669p.) に、「はる・なる」の一項を立てている。しかし実際には、その中に具体的な資料からの用例の提示は見られず、わずかに『浪花聞書』に見られる見出し語としての「はる」が挙げられているが、この場合は山崎氏自身も認めている通り、記述の実質は、「來なはらんか」という「ナハル」形である。また近世後期上方の洒落本を精査した奥村三雄氏も「近世後期京阪資料で、この語形 (ヨマハル形—引用者注) が殆ど認められない」と述べており、山崎氏の言うように、「助動詞「なはる」に当時「はる」を独立させる語感も存在した」可能性は考えられるとしても、その確証は得られないところである。

近世後期洒落本の情況については、先に注で挙げた奥村氏の「敬語辞系譜考」に、ナサル系を含む各種敬語辞の用例数が作品別に示されているが、そこでは各種敬語辞の比較・対照の方に主眼が置かれているので、以下では大阪板洒落本に限って、用例を検討し直してみることにする。

〈表1〉

属性	男性		女性		計
	若年層	中・老年層	若年層	中・老年層	
ナサル	8 (80.0)	20 (95.2)	129 (90.2)	60 (71.4)	217 (84.1)
ナハル	2 (20.0)	1 (4.8)	14 (9.8)	24 (28.6)	41 (15.9)

〈表1〉は話者の属性別に、ナサル系敬語辞の出現数を整理したものである。これを見ると、「ナサル」の中で一部に「ナハル」が使用されつつある様子が見てとれるが、その(「ナハル」の)使用は、女性がやや先行しているように見られるものの、属性的にはさほど顕著な差は見られない。⁶⁾また表に示すことはしなかったが、形態的な面からの分類(接頭辞の「お」が付くかどうか、命令形になっているかどうか、など)においても、特に際立った特徴は見られなかった。一方、作品別に見てみると(〈表2〉),

<表2>

作品	月花	陽台	聖	短華	畔の	十界	南遊	色深	北川	計
ナサル	4	2	10	23	26	25	61	43	23	217
ナハル	17	2	0	0	1	0	11	10	0	41
計	21	4	10	23	27	25	72	53	23	258

他の作品ではほとんど「ナサル」が圧倒的に優位なのに対し、『月花余情』においてのみ17例（81.0%）の「ナハル」が見られ、こうした作品（或いは著者）の性格や場面的な要素が、「ナサル」と「ナハル」の使い分けに関わっている模様である。

尚、資料が洒落本ということもあってか、待遇者・被待遇者の関係から見ると、「遊里の人々（男女を問わず）」から「客」への使用の場合が226例（全体の87.6%）を占めており、かなり定式化した用法であった可能性⁹⁾も考えられる。

次に江戸末期の情況を、一荷堂半水による戯作、『穴さがし心の内そと』¹⁰⁾及び『ことわざ臍の宿替』¹¹⁾によって調べてみることにしたい。<表3>を

<表3>

属性	男性		女性		計
	若年層	中・老年層	若年層	中・老年層	
ナサル	11 (100.0)	24 (100.0)	13 (65.0)	24 (96.0)	72 (90.0)
ナハル	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (35.0)	1 (4.0)	8 (10.0)

見ると、全体としては洒落本と同様の傾向が窺え、その中で「ナハル」の使用が女性（特に若年層）に限られていることが注目される。一方、待遇者・被待遇者の関係から見ると、そのほとんどは「店の側の者から客へ」或いは「（属性的に見て）下位の者から上位の者へ」使用されているが、中に5例ほど、下位と考えられる者への使用が見られる。但し実例を見れば¹²⁾わかる通り、これらはいずれも「～なされ」という軽い命令や注意の表現

になっており、こうした場合は話者が自己の丁寧さや優位を示すような対者敬語的な用法で、現在の一般的な用法にも通ずるものと考えられる。

3. 明治期の情況

明治20年代に出版された落語速記本を資料として、明治中期における情況を見てみたい。<表4>は、7冊の速記本に含まれる18話の作品から得られた用例を、語形及び話者の属性別に分類したものである。また、後に詳しく述べるための資料として、「ヤハル」「テハル」「ハル」形のものについては、用例を全て以下に掲げる。（*印は主体が対者の場合—以下同様）

<表4>

属性	男性		女性		計
	若年層	中・老年層	若年層	中・老年層	
ナサル	39 (65.0)	75 (88.2)	20 (54.1)	23 (76.7)	157 (74.0)
ナハル	10 (16.7)	8 (9.4)	15 (40.5)	7 (23.3)	40 (18.9)
ヤ]ハル テ]ハル	10 (16.7)	2 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (5.7)
ハル	1 (1.6)	0 (0.0)	2 (5.4)	0 (0.0)	3 (1.4)

「ヤハル」

- ① お日さまやお月さまやお星さまが澤山遊んで居やはつた（「天下嘘
背較」 小児→父）
- ② ヘエお梅ハんお宅に居やはりました（「妾の内幕」 丁稚→旦那）
- ③ 田中はんだすか来て居やはります（「迷ひの染色」 丁稚→若旦那）
- ④ あの おひと 彼御仁も怒つて居やはりますぜ（ 同上 丁稚→若旦那）
- ⑤ 夫でも（伯父さんが）言ふて居やはりましたぜ（ 同上 丁稚→若
旦那）
- ⑥ （伯父さんが）……と云ふて居やはりました（ 同上 丁稚→若旦那）
- * ⑦ あんた 貴公眼で知らして居やはッても……（「百年目」 幕間→番頭）

「テハル」

- ① イエアノ一人若いお仁が來てはりました（「妾の内幕」 丁稚→旦那）
- * ② （あなたが）其鹿を見て馬と云うてはるよってに……（「百年目」
丁稚→番頭）
- ③ 彼の人等は好い夢見てはると断念たら可い（「胴乱の幸助」 源兵衛
<若者>→喜八<若者>）
- ④ 彼の人等ア好い夢見てはるね（ 同上 喜八→源兵衛）

「ハル」

- * ① オヤ誰かと思ふたらお虎やんだすか何處へ行きはったノ（「妾の内幕」 お梅<妾>→お虎<妾>）
- ② （あの人<客>が）一度来て呉れはりさうな者やないか（「吹替息子」
娼妓→樓婦）
- ③ （彼の老爺さんが）仲直りに酒飲まして呉れはる（「胴乱の幸助」 源
兵衛→喜八）

まず<表4>からわることは、「ハル」及び「テハル」「ヤハル」の用例の出現が、数は少ないながらも、はっきりと見られることである。また「ナサル」は依然として有力な語形ではあるが、若年層においてはかなり「ナハル」への移行が見られる。そして、「ハル」「テハル」「ヤハル」の具体的用例からわることは、使用者に若年層の者が多いのはもちろんとして、敬語としての用法面から見ると、第三者（他者）待遇の場合で、しかも待遇者から見て被待遇者が比較的はっきりとした上位者（或いは初対面の15)人）の場合に、顕著に現われているということである。商家の丁稚のことばに「テハル」「ヤハル」の用例が多いのは、こうした傾向を端的に物語るものと言えよう。

尚、助動詞「ハル」の成立をめぐる問題については次章で詳しく触れるので、明治中期の速記本に見られる特徴についてはこのくらいに止め、次に明治末期の落語S Pレコードにおける情況を見てみたい。

明治36年以降に録音・発売された落語S Pレコードを資料として、一話16) 3～6分の22の作品から聴き取ることができた用例を、同じく語形及び話

<表5>

属性	男性		女性		計
	若年層	中・老年層	若年層	中・老年層	
ナサル	2 (4.7)	21 (42.0)	0 (0.0)	3 (11.5)	26 (19.4)
ナハル	36 (83.7)	24 (48.0)	12 (80.0)	11 (42.3)	83 (61.9)
ヤハル テ	4 (9.3)	3 (6.0)	2 (13.3)	3 (11.5)	12 (9.0)
ハル	1 (2.3)	2 (4.0)	1 (6.7)	9 (34.7)	13 (9.7)

者の属性別にして、<表5>に示す。また速記本の場合と同様、「ヤハル」¹⁷⁾「テハル」「ハル」形のものについては、その全用例を以下に掲げておく。

「ヤハル」

- ① 奥の方に居やはる年の若いええ男のやもめはんあるやろ（「長屋議会」 お崎<主婦>→お松<主婦>）

「テハル」

- ① あ、こらおかしいなあ、お父っつあん座ってはります（「近日息子」近所の人1→近所の人2）
- ② ああ、菓子屋(が)仕事してはる（「日和違い」 吉兵衛<若者>〔独り言〕）
- ③ ああ、（僧が）前まくって見せ（え）てはるが（ 同上 吉兵衛〔独り言〕）
- ④ お父さんがなあ、お茶屋の二階でじいと遊んではる（やつやったら……）（「電話の散財」 若旦那→番頭）
- ⑤ お父さんが、……行きやせんて、こう言うてくれてはるねん（ 同上 若旦那→番頭）
- ⑥ お母んいな、（親旦那が）またあんなこと言うてはるで（ 同上 芸妓→女将）
- ⑦ いえな、（親旦那が）来てはるのやがな（ 同上 女将→幫間）

- ⑧ 先方がえろう急いてはりますので……（同上 商人→親且那）
- ⑨ （電話の相手が）えろう怒ってはるが（同上 親且那→番頭）
- ⑩ あ、向こう呑んではるのやし（同上 芸妓→幫間）
- ⑪ あのお婆ん、長い間議長（を）務めてはるね（「長屋議会」お崎→お松）

「ハル」

- * ① （和尚さん）何しはってんな（「きらいきらい坊主」女中→和尚）
- * ② 君、ええ姫が二・三枚あるねん、付き合いはらんか（「魚尽し」田中<男1>→友人<男2>）
- * ③ 君、ちょっと三本だけ行きはらんか（同上 田中→友人）
- ④ ああ、そこの米屋や、こないだ俵くれはったんやなあ（「日和違い」吉兵衛〔独り言〕）
- ⑤ 向こう（の親且那が）聞きはるのやと（「電話の散財」女将→幫間）
- ⑥ （やもめはんが）上等の割り木、四本も返してくれはるね（「長屋議会」お崎→お松）
- ⑦ （やもめはんが）加減見てくれ言いはるさかいな……（同上 お松→お崎）
- ⑧ （やもめはんが）醤油仰山あると言いはるね（同上 お松→お崎）
- ⑨ （やもめはんが）ちゃんと二杯持って来て返してくれはるね（同上 お松→お崎）
- ⑩ （やもめはんが）世間へすることちゃんとしはるさかいなあ（同上 お松→お崎）
- ⑪ （やもめはんが）よう買うてくれはるやろと私思うわ（同上 お松→お崎）
- ⑫ あれ、裏の議長はん来はった（同上 お崎→お松）
- ⑬ ほいたら（やもめはんが）四本にして返してくれはるね（同上 お崎→お婆さん）

<表5>からまず明らかなことは、ナサル系敬語辞の主流が、（「ナサル」から）「ナハル」にはっきりと移っていることである。特に若年層において

ては、「ナサル」の用例がほとんど見られないことが目を引く。また、女性を中心使用が進んできている「ハル」形については、明治中期の場合と同様、第三者（他者）待遇の場合に多く見られること、及び、（属性的に見て）¹⁸⁾下位者に対する使用がほとんど見られないことが指摘できよう。¹⁹⁾

4. 助動詞「ハル」の成立をめぐって

[1] 従来の説の検討

前章では、落語資料を利用して、明治期大阪語におけるナサル系敬語辞の動向を全体的な情況から眺めてきたが、以下では、それらの資料の中に具体的な用例がはっきりと見られた「ハル」（「ヤハル」）形に焦点を絞って、その成立をめぐる問題について考えてみることにしたい。

尊敬の助動詞「ハル」の成立過程については、これまで何人かの方々による言及が見られるので、ここではまず、それらの説を先に検討し直してみることにする。「ナサル」形から派生したとする助動詞「ハル」の成立について最初に触れているのは、管見の及ぶ限りでは、前田勇氏の『大阪弁の研究』（朝日新聞社、1949）であると思われるが、それ及び、後年に出版された『大阪弁入門』（前掲注1）によって、「ハル」の成立に関する前田氏の説をまとめてみると、一般的には、まず「ナハル」の「ナ」が「ヤ」に変り、更に「ヤハル」の「ヤ」が落ちて「ハル」になったとされており、五段動詞で具体的に言えば、行キナハル→行キヤ（ア）ハル→行キヤハル→行カハル、²⁰⁾ という変化が想定されている。そして大阪で両形が観察される、ア段音接続の「行カハル」形とイ段音接続の「行キハル」形については、「行カハル」を「古風」、「行キハル」を「新風」としている。また、当時の話者の内省に見られた、「買ヒハル」式の方が「買ハハル」式よりも上品な物言いであるという点については、「彼等に正語意識が潜在してあたからではあるまいか（傍点前田氏）」²¹⁾ という説明を加えている。

次に、1962年に出版された『近畿方言の総合的研究』（三省堂）では、「近畿方言総説」（榎垣実氏執筆）と「大阪府方言」（山本俊治氏執筆）の二か所に「ハル」の成立に関する言及が見られるので、それぞれ検討して

みることにする。まず模垣氏の「総説」では、「イキハル」を大阪式、「イカハル」を京都式とした上で、²³⁾京都の場合は、イキナハル→(イキヤハル)→イキャハル→イカハル、の変化があったとし、他方、「イキャハル」「イカハル」「イキハル」の三形が使われている大阪の場合については、イキャハル→イカハル イキャハル→イキハル、の二種の変化を想定して、「イカハルも、イキハルも共に、イキャハルの変化形だと考えたほうがよさそうだ」(42p.)と述べている。

一方山本氏は、行キナハル→行キヤハル→行キャハル→行カハル、の変化を想定した上で、「「行か」を未然形と誤認し、ハルが打消の助動詞として析出される。さらにこのハルがヤハルと相似た表現効果をもつところから、ヤハルに代入されて、行キハルという言い方も生じる。そしてこの言い方が五段動詞以外にも起こって、

起キハル 見一ハル 受ケハル 出一ハル 来一ハル 為一ハル

という言い方ができたと思われる(傍点山本氏)」(441p.)と述べ、更に、五段動詞の場合の「ア段音接続」と「イ段音接続」の違いについては、「この場合は、ヤハルとハル以上に待遇差は少ないが、それでもどちらかといえば、イ段音接続によりていねいさを覚える。これは、たとえばイキハル(行)とイキヤハルとの音相の近似から、この比較はむしろ「ア段音接続」とヤハルに働く結果であろうと思われる」(458p.)と説明している。

また奥村三雄氏は前掲の「敬語辞系譜考」において、ヨミナハル→ヨミヤハル→ヨミヤハル→ヨマハル、という過程を想定している。奥村氏の場合は、既に注1などでも触れたように、論の中心が、「(「ハル」の成立が)「シャ(サ)ル」系からではなく「ナサル」系からである、という点に置かれているので、「ヨミハル」形については、「(伊賀方言におけるヨミヤハル形・)大阪方言におけるヨミハル形等の存在が、前述ナサル系説の有力な支えとなるのではなかろうか」と述べているのみで、その成立に関しては直接的な言及は見られない。²⁵⁾

こうして四氏の所説を検討してみると、現在においても京都を中心に強い勢力を持っている「イカハル」形の成立については、ほぼ一致した見解

が見られるものの、大阪を中心として、(特に「イカハル」と比較すると)かなり限られた範囲でのみ使用されている「イキハル」形については、イカハル→(「ハル」の析出)²⁶⁾→イキハル、の変化を想定する前田氏や山本氏に対し、イキハル→イキハルの変化を考える模垣氏の説があり、必ずしも一定していない。また、大阪における両形の待遇度の違いについては、「イキハル」の方がやや高いということで結果は一致しているが、その説明に関しては、前田氏のものにも山本氏のものにも、些か首肯し難い所が見られる。

[2] 落語資料からの推定

さてここで再び、第3章で概観した落語資料などを利用して、明治期大阪語における尊敬の助動詞「ハル」(特に「イキハル」形のもの)の成立過程を検討してみることにしたい。

次に挙げる<表6~8>は、江戸末期の戯作・明治中期の落語速記本・明治末期の落語S Pレコード、のそれぞれに出現するナサル系敬語辞のうち、一般には「ハル」形をとらない「お+動詞+ナサル」形及び(ナサル系敬語辞が)命令形の場合を除いたものを、動詞の活用の種類別に分類してみたものである。(尚、ナサル系敬語辞が「て」に下接している場合は、便宜的に、「て」の前の動詞の種類に従って分類しておく。)

まず<表6>から予想できることは、先に第2章でも少し触れたが、「ナサル」から「ナハル」への変化は、あまり動詞の(活用の)種類に関わっ

<表6> 江戸末期・戯作

動詞	五 段	上一段	下一段	変 格
ナサル	行きなさる(3) 言いなさる(2) 成りなさる 張り込みなさる	居なさる(4) 案じてなさる	上げなさる 当てなさる 掛けなさる 始めなさる	
ナハル	行きなはる 合わしなはる	居なはる(2) 見なはる		心配しなはる

<表7> 明治中期・落語速記本

動詞	五段	上一段	下一段	変格
ナサル	言いなさる(7) 行きなさる(2) 落としなさる(2) 隠しなさる(2) 〔他11例〕	居なさる(21)	食べなさる 見えなさる	しなさる(7) 来なさる(2)
ナハル	言いなはる(5) 打ちなはる 使いなはる 泣かしなはる 〔他3例〕	居なはる(2) 案じなはる		しなはる(2)
ヤハル		居やはる(8)		
テハル	言うてはる	見てはる(2)		来てはる
ハル	行きはる		くれはる(2)	

ではいないらしいことである。下一段型の場合がやや気になるが、<表7><表8>を見ても同様の傾向が窺える。

次に問題の「ハル」「ヤハル」についてであるが、<表7><表8>から見て言えることは、次の三点に集約できるように思う。

- (資料から見る限り)「ヤハル」形の出現は「居やはる」の場合に限られている。
- 「ハル」形については、「くれはる」「～てはる」及び五段動詞の場合が先行している可能性が強い。
- 五段動詞の場合は、ア段音接続の例は見られず、全てイ段音接続である。

このうちb c 及び aを総合して考えると、「ハル」の成立期である明治期の大阪語においては、「居やはる」の場合を除いて、「～ナハル」→「～ヤ

<表8> 明治末期・落語 SP レコード

動詞	五 段	上一段	下一段	変 格
ナ サ ル	置きなさる(2) 言いなさる 行きなさる 飲み直しなさる 〔他 6 例〕	居なさる 見なさる	寝てなさる	しなさる してなさる
ナ ハ ル	言いなはる(12) 読んでなはる(3) 言うてなはる(2) 読みなはる 〔他 6 例〕		捕まえなはる 貯めなはる 乗せてなはる	しなはる(4) してなはる
ヤ ハ ル		居やはる		
テ ハ ル	言うてはる 怒ってはる 座ってはる 〔他 3 例〕		くれてはる 務めてはる 見せてはる	してはる 来てはる
ハ ル	言いはる(2) 行きはる 聞きはる 付き合いはる		くれはる(5)	しはる(2) 来はる

「ハル」又は「～ヤハル」の変化は起こっておらず、「～ナハル」の「ナ」が何らかの理由で脱落し、そのまま「～ハル」形が成立した、と考えるのが最も合理的であるように思われる。もちろん、全体の用例数が少ないので確証は得にくいが、奥村氏が「ヨマハル」の成立について（ナサル系説の）傍証とした（注25参照）否定形「-ヘン」の成立の場合を参照してみると、今回とほとんど同様の資料を利用した筆者の調査の中で、「～ハセン」から生まれた「～ヤセ(ヘ)ン」「～ヤセ(ヘ)ン」の語形が多数見つかっているので、²⁹⁾「ハル」の成立の場合にも、（「居やはる」の場合以外に）「～ヤハル」「～ヤハル」の語形が存在していたとすると、それが全く用例の中に出現しないのは却って不思議に感じられ、ナハル→ハルという変化があ

り得たことの、一応の傍証になり得るのではないかと思われる。³⁰⁾

明治期大阪語において、「イキナハル」形から「イキハル」形が直接的に成立したと仮定すると、そこから（或いは「イキャハル」形を通して）更に「イカハル」への変化があったと考えるのは、変化の過程が多くなりすぎるためにかなり難しいように思われ、そうなると、大阪における「イカハル」形については、例えば京都などから外的な形でもたらされたと考える方が、無理のない説明になるように思われる。となると、例えば前田氏などの所説とは逆に、大正或いは昭和初期において、「イキハル」=古形・「イカハル」=新形、という時期があったことが想定され、こう考えれば、これまで言及された限りでほとんどの人々に共有されている両形の待遇度の違い（「イキハル」の方がやや高い、上品）については、「ハル」より「ナハル」が、そして「ナハル」より「ナサル」がより待遇度が高く感じられるという、ナサル系敬語辞における「古形の方が新形より待遇度が高く感じられる」意識が、そのまま反映したものと説明できるのではなかろうか。

今回の、変化の過程の推定のポイントとも言える「ナハル」→「ハル」への直接的な変化については、その背景として考えられる要因や理由については、これだけの資料からでは確定的なことはほとんど言えないと思われるが、その中で一つ気になるのは、「くれはる」形の存在である。今回の資料では、「くれなさる」「くれなはる」の例は見つかっておらず、速記本の中でいきなり 2 例（S P レコードでは 5 例）の「くれはる」形が見られるのである。この点に関して、全く関係がないことかもしれないが、注 29 で触れた打消の助動詞「ヘン」の成立過程において、不可能の意味を含む下一段型活用の「シレン」「ヨメン」「ミエン」などの場合に、（「シレヤヘン」などの過程を経ずに）直接「シレヘン」「ヨメヘン」「ミエヘン」などの形が成立しているらしいことが調査の結果わかった。先に注 30 でも触れたように、助動詞の「ヘン」と「ハル」の成立の過程を、似たような変化の流れの中にあるものとして捉えようとするることは甚だ危険であろうが、両者の成立の過程の中で特徴的に見られる、（一部の）下一段型動詞の場

合における急激とも言える変化については、今後の課題であることも含めて、更に注目してゆきたいと思う。

一方、「ヤハル」の形がはっきりと見られた「居やはる」の場合については、語幹が一音節であること、しかもそれが母音であることからすぐに「居はる」にまで変化することではなく、暫定的に安定する形として、「や」を採り入れた「イヤハル」形で、一応の落ちついた状態を迎えていたと言えるのではなかろうか。³³⁾

5. ま　と　め

これまでに検討した、（江戸末期から）明治期大阪語におけるナサル系敬語辞の変遷について、その要点をまとめると次の通りである。

- (1) 江戸末期においては、資料で見る限りでは、「ナサル」の中に「ナハル」が広がり始めた状態で、「ハル」の用例は見られない。また、ナサル→ナハルの変化は、話者の属性から見ると若年層の女性から進んでいると考えられるが、形態的な面からの特徴はほとんど見られない。
- (2) 「ナハル」は明治期の間に急成長したものと考えられるが、ここでも若年層を中心に行なが進んだということの他に、形態的な面からの特徴は見られない。
- (3) 「ハル」は資料的には明治期に入ってから発生したと考えられ、上接語との関わりから見ると、下一段動詞、五段動詞及び「（動詞連用形+）て」の場合から発展していったものと見られる。
- (4) 「ハル」と上接五段動詞との接続においては、従来一般的に考えられていた、イキナハル→イキヤハル→イキャハル→イカハル（「ハル」が析出されて）→イキハル、という変化ではなく、イキナハル→イキハル クレナハル→クレハル、といった変化があった可能性が強く（上一段動詞「居る」の場合は「イヤハル」になる）、同時期京都を中心として成立したと予想されるイカハル形は、イキハル形の成立後に大阪に進出した可能性が考えられるようになった。

注

- 1) 以前は「シャ（サ）ル」から「ハル」への変化を唱える説がいくつか見られたようだが、それについては奥村三雄氏の「敬語辞系譜考」（『国語国文』第35巻第5号、1966——『方言国語史研究』（東京堂出版、1990）に再録）や前田勇氏の『大阪弁入門』（朝日新聞社、1961——1977年に『大阪弁』として再刊）の「敬語表現」の項の説明などで事足りていると思われる。
- 2) これまで研究が進められている資料から考えて、「後期」とは宝暦の頃から文化・文政期にかけての時代、「末期」とはそれに続く天保期から幕末までの時代、とする。
- 3) 前掲注1の「敬語辞系譜考」108頁。同じく『方言国語史研究』769頁。
- 4) 後に比較検討する落語資料が、全て大阪語と考えられる（口演者が全て大阪市内で成長したと見られる）ためである。
- 5) 対象とした作品は次の通りである。『月花余情』（宝暦六年）、『陽台遺編』（宝暦六年）、『姫閣秘言』（宝暦六年）、『新月花余情』（宝暦七年）、『聖遊席』（宝暦七年）、『短華藻葉』（天明六年）、『眸のすじ書』（寛政六年）、『十界和尚話』（寛政十年）、『南遊記』（寛政十二年）、『色深狹睡夢』（文政九年）、『北川観般』（文政九年）——以上、『洒落本大成』（中央公論社、1978～83）に拠る。
- 6) 登場人物の年齢は不明なので、晰の内容や職業などから推定して、「若年層」と「中・老年層」に分けた。戯作や落語資料の場合も同様である。
- 7) 「ナサル」類と「ナハル」類に大別し、下二段型の「ナサレ…」や「ナスッ（タ）」形は「ナサル」に含めた。
- 8) 表から見ると、中・老年層女性の割合が高く見えるが、後に＜表2＞の説明で触れるように、『月花余情』の中だけでここに含まれるものうちの17例が現われるためで、『月花余情』を除いて計算し直すと、「ナハル」の割合は11.1%となる。
- 9) これとは反対に、「客」が「遊里の人々」に対して使用している例もわずかに（8例）見られるが、それらは相手をからかう場合とか、客から（遊里の人々へ）の感謝の気持ちを表わす場合とか初対面の場合などで、いずれも特別な意味が込められている場合のものである。
- 10) 『近代語研究』第四集（武蔵野書院、1974）に、前田勇氏による翻刻がある。前田氏の推定によれば、この作品の板行は元治（1864）前後のようである。
- 11) この作品の板行年は不明だが、半水の活躍時期などから考えると、『穴さがし心の内そと』とほぼ同時代ではないかと思われる。
- 12) • 日のくれぬうちにはやうもどりなされヤ（『穴さがし心の内そと』 初ノ六姑→嫁）
 • ワンといふなされ（ 同上 三ノ四 妻→飼犬）
 • そんならあげるたべなされ（ 同上 三ノ四 妻→飼犬）

- ・きつと身をつゝしみなされ（同上 三ノ六 伯母→後家）
 - ・心得ちがひをせぬやうにしなされ（同上 三ノ六 伯母→後家）
- 13) 「天下嘘背較」「短氣息子」（以上『改良落語』M23.9）、「白歯」「鶯宿梅」「菅公の木像」「妾の内幕」「焼物取」（以上『嘶の種』M24.4）、「迷ひの染色」「煙草の呑分け」「大黒のよみ切」（以上『芦のそよぎ』M25.2）、「百年目」「黒玉漬し」（以上『速記の花』M25.4）、「猿後家」「吹替息子」「三枚起請」「棒屋」（以上『滑稽曾呂利叢話』M 26.3）、「お玉牛」（『お玉牛』M27.5）、「胴乱の幸助」（『胴乱の幸助』M27.5）。7冊の速記本は全て国立国会図書館蔵本である。
- 14) 「ハル」が「や」「て」に下接した「ヤハル」「テハル」形については、用例数がさほど多くないこともあり、便宜的に一括して分類しておく。
- 15) 第三者（他者）待遇の用例の割合は、「ヤ（テ）ハル」が83.3%，「ハル」が66.7%であるのに対し、「ナサル」の場合は17.8%，「ナハル」の場合は5.0%である。また、待遇者から見て、被待遇者が（属性的に）下位者であると考えられる場合の割合は、「ナサル」では約15%，「ナハル」では約20%である。
- 16) 「馬部屋」「盲の提灯」「天神咄」「魚売り」「亀屋左兵衛」「きらいきらい坊主」「煙管返し」（以上M36）、「一枚起請」「いらちの愛宕参り」「魚尽し」（以上M40頃）、「いびき車」（M42頃）、「近日息子」「絵手紙」（以上M44頃）、「鉢盗人」「僕約の極意」（以上M末～T 初）、「日和違い」「電話の散財」「長屋議会」（以上T12）、「さとり坊主」（T12頃）、「理屈あんま」（T13以降）、「やいと丁稚」（T14）、「浮世床」（T15頃）
- 17) 今回調査対象としたS P レコード資料は全て、拙稿『二十世紀初頭大阪口語の実態』（平成二年度科研費報告書、研究代表者真田信治、1991）の「録音文字化資料」の部分に翻字したものを収載している。また、今回は特に慎重を期するために、聴き取りが紛らわしい一部の用例については、関西方言（奈良）のネイティヴな話者である中井精一氏に、再度の聴き直しをしていただいた。
- 18) 今回と同様の資料を利用して調べた指定表現（「ジャ」→「ヤ」）や打消表現（「ン」→「ヘン」）の場合にも、大体、若年層女性→若年層男性→（中年層）→老年層、という変化の流れが見られた——本文前掲の拙稿「明治期大阪語資料としての落語速記本とS P レコード」及び「明治期大阪語の打消表現」を参照。
- 19) 第三者（他者）待遇の用例の割合は、「ヤ（テ）ハル」が100.0%，「ハル」が75.0%であるのに対し、「ナサル」は46.2%，「ナハル」は9.6%である。また、待遇者から見て被待遇者が（属性的に見て）下位者であると考えられる場合の割合は、「ナサル」の場合が約38%，「ナハル」の場合は約11%である。
- 20) 『大阪弁の研究』では、
- 行キヤハル → 行キハル → 行キハル
 └ 行カハル

- という変化が想定されているようにも受け取れるが、この部分、説明もわかりにくいし、納得し難い所もあるので、『大阪弁入門』に、主に従った。
- 21) 「尊敬形=動詞連用形+尊敬助動詞」を「天下の公式」とすると、「買ヒハル」式の方が「醇正な物云ひ」になるということ——『大阪弁の研究』233頁。
 - 22) 敬語としての「ハル」については、「京都府方言」(奥村三雄氏執筆)など、他の府県の部分でも触れられているが、ここでは省略する。
 - 23) 大阪で「イキハル」、京都で「イカハル」が主に(京都ではほとんど)使われるという情況は、現在でもほとんど変わっていないようである——宮治弘明「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」(『国語学』第151集、1987)、中井精一「関西共通語化の現状」(『阪大日本語研究』第4号、1992)他を参照。
 - 24) この部分は、尊敬の助動詞「ヤハル(ハル)」と打消の助動詞「ヘン」の接続について総合的に述べているところなので、この「打消」は「尊敬」の間違いだらうと思われる。
 - 25) 奥村氏はまた「ヨマハル」の成立について、否定形「ヨマヘン」の成立においてはヨミワセン→ヨミヤセン→ヨミヤセ(or へ)ン→ヨマヘンのような変化が想定しえることを、(ナサル系説の)傍証としている——この点については後に触れる。
 - 26) 現代の代表的な辞書の一つである『日本国語大辞典』(小学館、1975)においても、この成立説が採用されている——第16巻、「はる」の項。
 - 27) 前掲注23の中井論文によれば、現在でもこれと同様の傾向が見られるようである。
 - 28) 「おいでなさ(は)る」については、一応「おいで(る)」を動詞と考えることができるが、「お」の付かない「いでなさ(は)る」という例は見られないでの、この形式に準ずるものとして表からは除いた。
 - 29) この点については、「はじめに」で挙げた拙稿「明治期大阪語の打消表現」に詳しい。そちらで見ると、「~ヤ(ヤ)セン」の形が速記本で14例・S P レコードで14例、「~ヤ(ヤ)ヘン」の形が速記本で3例・S P レコードで4例、出現している。
 - 30) 動詞の活用形との関わりで、京都と大阪の相違の典型的な例とされる、「イカヘン」:「イケヘン」と「イカハル」:「イキハル」の関係については、その地理的な分布などに関しては、現在かなり密接な関わりがあると推定されるが——この点については岸江信介氏の指摘(「京都・大阪間グロットグラム」、変異理論勉強会第25回発表、1992.3.29)がある——少なくとも明治期における助動詞「ヘン」と「ハル」の成立の時点での情況については、両者を似たような(或いは同様の)変化の流れの中にあるものとして捉えようとする見方は、かなり危険であると言えよう。
 - 31) 京都などでの「イカハル」形の成立については、従来の、イキナハル→イキ

ヤハル→イキャハル→イカハル、という変化の説明が充分納得し得るものである。

- 32) この点については、前田氏にも山本氏にも言及が見られる。
- ・原形「なさる」に近づくほど手厚さを増し、それから遠ざかるほど手厚さを減ずるのは、言語の本質である（『大阪弁』190p.）
 - ・もしも両者（「ハル」と「ヤハル」——引用者注。山本氏は上述の通り、ヤハル→ハルという変化を想定している）の待遇差に意識的になれば、ヤハルによりていねいさを覚える。これは、ことばの推移を、「くずれ」と感じ易いわれわれの言語心理から当然であろう。さらについねいさを意識すればナハルを用いる（『近畿方言の総合的研究』457～8p.）
- 33) <表7><表8>などから見て、「居やはる」の場合（多分「見やはる」の場合も）、「居（一）ハル」「見（一）ハル」形の成立は、他の動詞の場合よりも遅れたであろうことが予想される。

（岡山大学文学部講師）